研究余滴

モスクワの読書風景

尾　崎　彦　朔*

この部屋のばか高い側壁を倒して，逆に床面にしたならさぞ広々とした居室になるだろうな！　狭くて高い窓にかかった古いどっしりしたカーテンを引くたびに，いつもそう思う。けれども窓を開けば，視点がモスクワのいちばん旧いセンターの一角，のぼり坂の中途にあるだけに，恐らく革命以前からの街区そのままの屋根，そのはざまの，つい目の先にボリショイ大劇場の正面小屋根の緑青色にさびた“兵車を馳るローマの戦士”の像に横対する。

私は毎朝，このボリショイ・テアトルの大屋根の端にのこった残雪の，一寸きざみに後退するのを確認しては，出勤？する。

この宿舎ホテル・ベルリン（旧名ガスチニツァ・サボイとして古くから知られる）を用意してくれたルキャノヴァ博士に，10ルーブル（11＄）は，私にとって高すぎると苦情をいったことが，いくらか悔やまれる。（すべて生活は自前でするから研究上の便宜だけは頼む，という約束で入ソしたのだが，それでもアカデミーでは通常の旅行者の½以下の旅宿を割り当ててくれた。後にルキャノヴァ女史のはからいで更に½方安いオスタンキノへ移ったが。）

この宿舎は，すぐ隣接してデツキー・ミール（子供百貨店），そして坂上のジェルジンスキー広場へ，坂を下るとボリショイ劇場広場，それとT字に延びてクレムリの壁沿いの赤の広場に連なる。もう一方はモスクワ大学の鉄柵にそってレーニン図書館へ通じ，私にとっては最上の地の利だ。

私の出勤？は，1日，坂をのぼりジェルジンスキー広場を横切って，さらに3つほど小路をくねってアルミャンスキー通りのボストコヴェジェーニエ（東洋学研究所）へ，次の1日は，坂を下って，マルクス大通りを西行約20分，そこのレーニン名称・国立図書館（レーニン図書館）へ。これが，私のモスクワ生活最初にしかれた軌道であった。

早春の残雪が建物の内庭を白々と敷きつめ，好んで歩いた裏露地の曲り角で，肩越しにドサリ高い屋根から水づいたカキ氷のような雪泥が落下する。

ボリショイ劇場前の小広場を出るとマルクス大通り，それをへだてて，“赤の広

＊おざき　ひこさく　大阪市立大学教授

場”へ通ずる上り坂の起点にある小広場に，御影石の土台ぐるみ一石刻みの巨大なカール・マルクス像が，４月はじめの北国特有のドンヨリした日ざしを受けて屹立している。足もとの汚れた雪だまりを蹴散らしていた真黒い烏が――このイヤな奴は，どこの国にもいるとみえるが，こともあろうに，モスクワの都心のこの場で，２～３羽，ひょいとマルクスの頭に飛びあがって，あの壮重ともいえるふさふさ髪で嘴を研いだり蹴爪をこすったりしている。まだ木の芽の堅い樹下のベンチに老爺が２人３人黙然と微動もせずにかけている。すぐその向いか手前は，さしあたり銀座６丁目といってよいだろうか，交通ポリの白い警棒がせわしげに動き，各地各国からのとりどりの服装をした人の流れが激しい。（見たところ人間の方はあまり従順ではなさそうで，車だけがポリスの管制下にあるような，）そんな喧騒とは石のマルクスとベンチの閑人は透明な空気の幕で遮断されてあるような風景だ。インツーリスト本部の建物を過ぎると国立モスクワ大学（ここには文科系があり，ナポレオンで有名な雀ケ丘の巨大なスターリン建築の見本モスクワ大学は自然科学系）文学・語学系諸学部そして恐らくあとから分断されたと思われるゲルツェン通りによって区切られた社会科学系学部の狭苦しいキャンパスがならぶ。鉄柵で大通りと区切った内庭の，創始者ロマノソフ像側のベンチにそこだけ雪をはらって男女２人の学生が大口をあけて何か愉快そうに話をしており，そのすぐとなりで亜麻色の髪を背にたらした女学生が１人，形よく組んだ膝の上に部厚な本を開いてかがみこんでいる。一見してわかるプロフェッサーがそそくさと像の裏手の道を大股にあるいて建物の中に入ってゆく。

大学区劃がカリーニン大通りで終ると，向う側がレーニン図書館の疑古典的な新館の巨大な建物，屋上側壁に並列して飾られたヨーロッパ古代の学術を代表する巨人たちの見おろす円柱群の玄関に至るのである。

レーニン図書館にて

図書館の研究者用閲覧許可には，この国らしい複雑な手続きが必要らしい。私の場合，所属研究所長からの公文の「科学アカデミーのお客である尾崎教授は云々……」という添書を持参し，ちょうど所員で許可証書き替えに出かけるラトゥイシェワ女史（女史は最近日本研究からマレーシア研究に替った有能な中堅）が同行してくれる。赤色の堅表紙の“門鑑”様の許可証を下附される。ラ女史は同様緑色のそれだ。この表紙の色分けは館内第一歩ですぐわかったことだが，利用者の身分と利便等々の格を現しているのだ。先ずクロークで，門鑑の表示によって受付けが異なる。ここで外套，鞄，包等持ちもの一切を召し上げられてしまう。アチラの人のように両手を拡げて肩をすくめ，眼鏡を鞄からとり戻すとき，人のよさそうな太った受付けのおばさんは，ノートとペンだけはよいがその他は一切だめだ。それは決ま

りだから仕方がない，えゝえゝ，もちろん辞書も，ノートではないですから……。語学の力に恵まれない私には，これは傷手だ。見るとラ女史も小さいハンドバック１つで他のクロークからこちらへやってくる。ハンドバッグはいいのよ……と女史はなれた口調でいうのだが，そのバッグも最後の出館の際に開けさせられた。このくらい厳重でないと1,000万部の蔵書の保管はむずかしいかもしれない。

吹抜けの中央大ホールの回廊式になった中階がカード室だ。背の高さにギッシリつまったカードボックスのあたかも街区のような細路を縫い歩く。システムはわれわれの日常なれたもので別段の変わりはない。全体を見わたせる張り出しの小ホールに，1917年レーニンがペテロ入りする直前までフィンランドの農屋で使っていたという，それは粗末な古ぼけた小机と椅子が，鎮座している。

ラ女史の案内で見学に入った彼女の６号ホールの，大きく豪華だが満席のムンムンする，それでいて静粛さがページを繰る音をワサワサひびかせる。天井桟敷風の側階の席も満員だ。ホール正面の大壁に掲げられた200号大の，あの大きな頭を片手で支えながら読書するレーニンを，どこの机から顔を上げても正対せざるを得ないような机の配置だ。この国祖の画像が，ソ連の御曹子たちの群を（といって，このホールではすべて専門家連だが）一層緊張へ追いやるのかもしれない。そういえば，あるジャーナリストがモスクワ生活記で，「あの人たちは怠けものよ！　勉強すればいくらでも昇進できるのに，自分から好んであんなことしているのよ！」と雪掻き人夫の低給女性労働者を説明した婦人エリートの言葉を引いているのを思いだす。街区の泥雪は誰かが処理しなければならない。生活・人格・地位等々の向上のチャンスは，万人平等に制度が保障している。そこではただ，よりよきチャンスを摑み得る自分の能力＝技術をみがき修得すればよいということだろうか。

このような表現にみられる典型的な管理社会の人間像を，いま，この熱気あふれるホールの雰囲気と結びつけることは，もちろんできない。日本の私の経験では，満場のこのような熱気が恒常的にある風景はギャンブル・スポーツか歌祭り以外には知らない。ソ連社会の知的探求のバイタリティーの一端を見る思いだった。けれども，私に与えられたこの赤表紙の第１ホールの座席は，（ホールはおよそ100席）間隔を十分とった壮重なオークの机に殆んど人影は稀だ。多い時で７～８人，時には私独りで，豆字引一つもち込めないのをかこちながらホールの一隅に陣取った部屋付司書女史の大アクビをそっと見やるのだ。ホール入口の４メートルはある高い黒皮張りの扉の，金ピカの把手に手をかけ，ふと仰ぐと「アカデミー会員・ドクトル・プロフェッサー以外は入るべからず」と大きく表示してあるのだ。案内してくれたラ女史が，ここからは……といって自分の満員のホールへ戻ったのもこの看板のせいなのだ。

研究所図書館にて

都心にありながら裏通りにあたるアルミャンスキー小路のボストコヴェジェーニエ（東洋学研究所）は，1812年ナポレオンのモスクワ遠征にも生きのこった貴族女学校の由緒ある建物だ。古めかしく静かな美しいこのバロック風のちんまりした建物に300名近い専門家とそれに附随した沢山の要員がつめこまれているのが，何ごとも尨大なソ連にあって，それは一つの奇観でもある。その「なぞ」は，すぐ解けた。ここには研究員の個別の施設はないのだ。図書館施設に附属したそれぞれ5～60席ほどの閲覧ホールが2つ，200席ほどの集会用中央ホール，それに各部の事務室と若干の小会議室，あとは編集室，小食堂……

段違いに入りくんだ廊下のあそこでも，ここでも，ドクトル某がアスピラントの若者をとらえ，或はとらえられて喧々議論をし，また外国帰りの同僚の肩をかかえて久濶をのべあう。昼時ともなれば，玄関ホールの壁にしつらえられた折たたみ椅子を引きおこして賑やかさはこの上もない。私が所長アカデミーク・ガフーロフ老博士にルキャノヴァ女史から引き合わされたのもこの玄関ホールだ。研究員の出所日は月曜日全員，他に週1回何曜日かに部員会（主として各部の定例研究会に当てられる）がある。つまり義務的出所は週2回だけだ。それでは研究員は，どこで勉強するのか，彼らは必要に応じて，レーニン図書館へ，また，より専門的なフンダメンタル・ビブへ，それから自宅で……それでも所内図書館は平日ほぼ一ぱいである。閲覧ホールは身分上の利便の差異はない。名のうれた古参の研究員も，恐らく生え抜きの“わが家のオバさん”然としたカード係の途方もなく親切な小言をあびながら，若い娘たちばかりの貸出しの窓口を通じて必要書籍を受けとっているし，ホール入口の扉の内側においてある大きなガラスの水差しの，フタ代りにかぶせてあるコップをとって，（ちょっと日本ではまねのできないことだが）先の誰かがしたと同じように自分の飲むだけの水を注ぐと一気にあふって，そのままコップをふたにかぶせて出てゆく。ホールの壁側にしつらえられた書架には，マルクス・エンゲルス・レーニンの全集各版，それに党決議決定集がそなえてあり，これだけは室内に限り随時自由に利用できる。何時間かの読書にあいて廊下に出ると，顔見知りの誰かに1人2人はたいてい会うのだが，ひとしきり立ち話し，話が合えばそのまま街へ，たまには一流レストランのバンドを聞きながら，あの気の遠くなるほどの待ち時間を享受して高級な料理にありつくというものだ。けれども，われわれ外国の遊学者の一見暢気な観察は，週一度の定例研究会の日には必ず訂正をせまられるであろう。11時会場にあてられた小集会室は内側からピチンと閂がおろされる。出入りは座長の許しがいる。3時4時，時には5時まで連続の，もし報告者が若手であろうものなら正にシゴキ？だ。遠慮のない質問，反論，汗をふきふき，日頃のノ

ンビリさを悔やもう，というものだ。年末には，その年度のノルマ（研究論文枚数で決定，質は平準的なところは研究会段階で整序されるようだ）が自分の身分と前途をうかがっている。とするなら，それははなはだ日常の学習的緊張と関連せざるを得ないであろう。（教育公務員特例法の有がたさが，正身の利点と，その利点の故に腐臭をはなつわれわれの日常と比べてどうであろうか？）

それにしても，われわれの手に負えないのは，こちらの研究機関全般についてだと思われるのだが，事務機構の繁さ，スローさだ。例えば，資料のコピーを必要とするとき，まず所長あての書類を提出する。許可があってからコピー係に回される。それから数日かかって，やっと注文の資料写しが手に入る。ゼロックス程度の事務機器の利用などたいした金のかかる設備ではないのだが，私のモスクワ生活中お目にかかったことは一度もなかった。もちろん大レーニン図書館でも全く同じで，知人の某教授など貴重な20年代の大部な書物を，中世紀の篤学者よろしく筆写してしまった程だ。

チターリナヤにて

通勤の電車バスの中での読書人の多さからいうと，モスクワ人は，恐らく日本人とならんで世界の優位にあるのではなかろうか。書店の数からいっても相当なもので，どの街通り，どの住宅団地にも，かなり大きな書店が必ず目につくし，たいていの街角にあるキオスク（ボックス式の売店）には，名物アイスクリーム専用からタバコ・新聞・雑誌，ちょっとした文学書，社会科学書までならべている。日本と違って軟派出版の殆んどないこの国では，ひげ付？ヌード写真にお目通りすることはない（69年のプラハの街頭ではそれが堂々？ウィンドウに並んでいたが）が，時として地下道や，街頭で，私家本（公認された）の詩集や漫画の冊子を声高に立ち売りしているのにお目にかかる。試みに割高なこの漫画本に手を出してみる。ソフトな風刺が，うかがえて面白い。

春を一気に飛びこえて夏に入るモスクワでは，緑の小園，ブリバール，大公園が至る処にある。朝出掛けに，ブリバールの片隅でチェスを囲んでいた老人連が，夕方帰るとき，そのままま だ打ち続けているのを見かけたことがあったが，こうした風景は，読みものの場合は一層しばしば出会う。それも多くの場合老婦人たちだ。恐らく年金生活に入った人達であろう。その内容は文学それもトルストイ，プーシキン，とわれわれにもなじみの深いロシア古典が多いようだ。知り合ったある老婦人は「戦争と平和をやはりこの木陰でもう3回目読んでいるという。別に知的労働に従ったとは見えない老婆の，家族とか周囲にわずらわされない楽しみとしては，極上のものであろう。そう云えば，夏のモスクワで，日本人の旅行記・談話に一度も姿をあらわさない名物に，「チターリナヤ」がある。これは読む＝チターチから

きた言葉で，いわば簡易図書館だ。それもたいていの公園，有名庭園跡の一隅に蔵書の貸出し事務の小屋を設け，それを中心に深い緑蔭を区切って椅子，時には小卓を用意して，心ゆくまで読書にひたれるようにできている。例えば，レーニン・スタジアムとモスクワ河をへだてたゴリキー公園のチターリナヤをのぞくなら，あの話しずきなモスクワ人が，多数おもいおもいに黙々一書を前にして沈思している姿に接する。そして点々とおかれた個席のどこかに新しい知人ができたとしても，彼・彼女らの話し声はヒソヒソあたかも緑の梢が微風にかすかすれ合うような，そんなに静かなのだ。知的専門人でもない年配者が独り静かに書を読む風景，これは，ひょっとしたら現代の奇蹟かもしれない。古いモスクワ人の習慣だろうか，ソ連社会の新しく作られた伝統だろうか。もし誰かが，遊び場の少ないソ連の退屈な暮しの証しだ，などと云ったとするなら，それはそうかも知れない。けれども，この小賢しい批評はそれなら退屈を許さない遊び場とはなんであろうかについて，あらかじめ答を用意せねばならないだろう。そこで待ちかまえているものが，人をして精神の死に至らしめる狂燥だけだとするならどうなるのか。

こうしたモスクワ街頭の読書風景は，ソ連社会の深層の案外な露頂の一端かもしれない。

(1970・12・30)

リプリント版ごあんない

刊行開始第1回入荷

ドイツ社会民主党理論機関誌

Die Neue Zeit

Wochenschrift der Deutschen Sozialdemokratie

Jahrgang 1–41. Bd. II, Heft 1–10
Berlin 1883–25. August 1923
Nachdruck in 74 Leinenwdbdn. 1971–73
(Detlev Auvermann, Glashütten im Taunus)

1971年刊行／**在庫** Jahrgang 1–8 ¥ 115,000

おもとめになりやすく3年分割出版　1973年完結.

(日本販売総代理店・**極東書店**)

東京・神保町 **極東書店** 電話03(265)7531 振替東京100009 営業所 大阪・京都・福岡